

隔週連載 第12回(最終回)

# 違犯と身ぶり

—アメリカ演劇を  
異化する者たち

粉川 哲夫

今日の高度資本主義社会における支配と管理は、消費(させる)を通じて行なわれるのだから、一見政治とは無縁にみえる商業演劇こそ其きわめて政治的な演劇と言えらる。従って存在するのは、政治的演劇と非政治的演劇ではなくて、現状肯定的政治演劇と現状否定に負担する政治演劇である。言いかえれば、右翼演劇と左翼演劇である。

アメリカの左翼演劇は、ビクター・シュマンの『ブレッド・エンド・パベツト・シアター』のようないくつもの刺激的な左翼劇団が登場した60年代のつかのまのルネッサンスの後、ふたたびものと静寂にもどってしまった。あそこには、左翼演劇、風の商業演劇と、非商業演劇、といふ名の商業予備演劇だけが残った感じが深い。アメリカの左翼演劇の可能性は今後どこに求められるのだろうか？

このような状況のなかで、適宜なまでに左翼劇だけを書きつづけてきた劇作家マリオ・フラッティ(一九二七-)にたずねてみた。彼の名は日本でもすでに、『橋』(邦訳、未来社)『冷蔵庫』、『チェ・ゲバア』、『チリ・一九七三年』などの上演を通じて知られている。

若い作家たちの大半は、商才にめぐまれ、若い者ばかりで、政治的意識などこれっぽっちもありません。わたしは演劇批評家でもあるので毎晩芝居をみますが、その96%に失望させられます。そこには何の観点も何の結論も何の方向もありません。

まあ、唯一の例外は、サンフランシスコの『マダム・トゥループ』かな？ これは実に小さな劇団でね。俳優たちはみな貧しい。だからこの劇団がいつまで続くかはわからないが、実にすばらしい芝居をしていますよ。コメディア・テラルテを政治的武器にした芝居では、まず広場でアレルクィノ、パルチネラ、パンタ

## 左翼演劇の可能性

マリオ・フラッティ

逆説的な  
状況のなかで —  
インタビュー

ローネたちでちょっと道化芝居をやっている。実にくだらないスラップスティックを観客は何だかどうと思つて集まつてくる。ところがそれがいつのまにか政治討論の場になつてやうなんだ。なかには途中で驚いて逃げ出すやつもある。以前、本番がはじまつたらまるでボロボロでもみせられたみたいにあわてぶりで娘の手をひっぱつて逃げた。父親を見た。アメリカらしいよ。

アメリカについていうのは、98%の人間が2%の人間に経済的・文化的に搾取されているような国なんです。ニューヨークで二年三年のロングランに成功する芝居はアロードウェイのミュージカルかライ



マリオ・フラッティ

—しかし、大学にせよテレビにせよ、それらは現状のシステムにがちりくわえこまれていきますね。

フラッティ、そう、だからほくほくはね、根本的にはアメリカが必要としているの劇をこのアメリカで書き続けようとしていた。文化革命というものは、ヨーロッパや中国のような集団性のちゃんとした伝統があるところではじめて可能であり必要なのであって、アメリカみたいに依然として男はライオン、女は虎になること、独力で人より強く、裕福になることを至上の価値としていて、グラムシ流の深い根をもった集団性を全く侮辱しているところでは話にならないんじゃないか。だからアメリカにとって革命の最大の教師は、経済危機だと思つた。アメリカ人が預金や職を失なつてごらんよ。ヨーロッパや中国人なら助けあつたらうが、アメリカ人はおそろしく暴力的に、攻撃的に、革命的になるのさ。失なつたものを取り戻すことをね。

—それは経済決定論的自動崩壊論みたいですね。フラッティ、いや、ほくの言葉のは、そういうアメリカ人の特性からアメリカ人は学ばべきだということなんです。革命の可能性という点で言

えは、アメリカは人類最後の資本主義国になるのじゃ



写真 Ⅱ サンフランシスコ・マダム・トゥループの舞台